

風景概念の論理的構造に関する考察 (I)

伊 藤 精 晤

信州大学農学部 造園学研究室

目 次

I はじめに.....25	IV 風景の場面構造に関する考察.....38
II 考察の観点と方法.....27	1 風景の場面構造.....38
1 考察の観点としての近代の風景概念の成立.....27	2 場面の空間階層と時間階層.....38
2 考察の方法.....30	3 場面の主体契機.....40
III 風景概念の意識構造に関する考察.....31	V 風景の知覚構造に関する考察.....41
1 風景知覚の外界側面.....31	1 風景の知覚構造.....41
2 風景知覚の内的側面.....32	2 風景の知覚空間の論理的構成要素.....43
3 風景概念の意識構造.....33	VI 総合的考察.....45
4 風景の総合的知覚形式.....35	注および引用文献.....46
	Summary49

I は じ め に

各個人の外界の知覚は多様な外界の捉え方と多様な心理状態によって変化している。各個人は社会生活を行う点で共通の生活環境と共通の生活様式を有し、各個人の間に共通した知覚もあると考えられるが、それがどの程度のものであるかは不明である。ルカーチによれば¹⁾、日常生活の大きな流れの中から科学や芸術が分岐し、分化し、それぞれの特殊な目標設定に対応して形成され、この一社会生活の要求から発する一特性を帯びた純粹形式に到達して、その効果や影響を人間生活に与えたのち、ふたたび日常生活の大河に還流する。すなわち、日常生活の知覚の内容は科学や芸術の成果との交流において客観化されてくる。外界の全体的知覚像の表現としての風景はヨーロッパの近代の絵画や文学において追求されており²⁾、芸術活動によって見出された風景の表現は人々の日常の風景の知覚に影響を与えることによって、共通の知覚像を提示し、芸術的創造はその知覚像を深く追求し、内容豊かなものとしていった。近代において風景を見出した人々にとって、共通した態度と共通の外界像による風景を持ちえた。

しかし、現代の今日、風景は芸術の創造的追求の対象から遠ざかっており、人々の風景の知覚は固定されたイメージを越えるものではなくなっていると指摘されている³⁾。また、物質文明が支配的となったわが国においては風景を見ようとする態度を持たない人々が多数いることが指摘されている⁴⁾。一方、生活環境の改変は急速かつ広範囲に及び、人々の生存の

ための環境すら悪化させるに到っている。同時に、自然的、歴史的に形成された地域の空間的調和や全体性を破壊することも多く、風景として知覚される環境そのものが喪失している。

人々は日常的知覚で最も直接的に環境の改変を感じとっているだろうが、主体的に対処していくためには周囲の広い環境と自然に目を向けていくことが現実にはせまられている。さらに生活環境の改変を動的なシステムとして秩序づけ、人々が一定の目標をもって、そのシステムを管理する計画的対処が必要とされるだろう。人々の風景の知覚は生活環境を総合して把握、生活の快適さによる評価を含んでおり、計画の一定の目標として意味を持ちうると考えられる⁵⁾。

今日の人々が風景を見ようとする態度を持ち、風景の固定されたイメージを脱し、芸術的創造による刺激が再現し、人々に共通の外界像が追求される事態が生じた場合、近代の風景の追求は大きな成果として、今日の風景の追求の土台とされるものである。芸術家の追求によって創造され、洗練されてきた外界の全体像に対する知覚の形式が近代の風景であり、その形式の全体と部分を創造したものとして、芸術家とその諸作品をかってラスキンが⁶⁾、今日、ケネス・クラークが⁷⁾ 評価している。今日、芸術的創造の刺激が与えられないとしても、元来、各個人は主体として創造を行いうるものであり、風景の追求の可能性はいくつかの点で以前より大きくなっている。すなわち、既に近代の追求における成果があり、その風景の知覚の形式は一定の主体の態度と外界像の把握を明らかにしているといえるからである。その上、人間主体の考えは今日の社会でより普遍化し、科学の進歩は外界像についての知識を豊富にし、その知識と科学的態度を一般に普及させている。知覚そのものも科学的対象とされ、理解が深められている。知覚の記録手段も視聴覚に関して飛躍的に発展し普及している。一方、何故、風景は近代以後に芸術的創造の対象から遠ざかったのか、その原因もまた今日の現代社会にあり⁸⁾、それ故、風景を芸術的創造の対象とするにはより以上の困難さがあるだろう。ここではその困難さを明らかにするよりも、風景の追求の可能性を明らかにしたい。以上の点で近代の風景概念の構造を今日の新しい条件からの可能性としていかに示しうるかを課題として考察を進めようと考えた。

この考察を進めるに当たって参考としうる多くの風景についての論考があり引用させていた⁹⁾、風景を近代におけるものと特定し、それを論理的構造として示す試みは独自のものである。これによって風景は客観的な基準を有することができ、風景の破壊を意識化することと、現代の風景の創造にとっての土台となることの意義があると考えた。この考察は数年前より試論として草稿としてきたものであるが、科学的論文として示すには自信が持てないでいた。しかし、主観的なものである風景の知覚も客観的に論じうる部分や構造を明らかにすることが必要とされ、それには近代の風景の概念を前提とすることによって考察が可能であると考え、ここに展開を試みた次第である。この論文をまとめるに当たって、主題そのものの示唆を与え、拙い草稿に目を通し、有益な助言を与えて下さった中村一京都大学農学部教授と菅原聰信州大学農学部教授に深く感謝したい。

Ⅱ 考察の観点と方法

1 考察の観点としての近代の風景概念の成立

風景概念を考察していく上で実体から出発しなくてはならないが、風景の実体は各個人の知覚に生じ、主観による差異があり、その知覚の全体が表現されることもない。すなわち、他人からは知ることもしないし、共通のものでもないので客観的に捉えることができない。ここでは芸術家によって追求され、作品として外化し、一定の形式として客観的に捉えうるものとされたヨーロッパの近代の風景を実体とし、その概念を考察するという観点に立つのである。そこでヨーロッパの近代において何故、どのように風景は追求されたのか、また、その結果生み出された風景の知覚形式とはどのようなものなのかを明らかにしておきたい。

風景画は近代になってはじめてあらわれたといわれるが、その起点は中世から近代への転換期のルネッサンス期に求められる¹⁰⁾。風景画に見られる風景の追求の歴史的な変遷は既にラスキンとK・クラークによって論証されている¹¹⁾。風景の追求は絵画が直接視覚に訴える芸術として表現の可能性を持っているが、詩などの文学、庭園における空間造型にもその追求がなされた¹²⁾。こうした近代の風景の追求を成立させた要因は人間の主体としての自覚、空間の知覚法則の発見、外界の科学的認識であるが、とくに空間の知覚法則の発見というのは透視図法である¹³⁾。透視図法は主体を中心に置き外界を空間的に秩序づけて知覚する方法であった。透視図法の発見と適用は建築と庭園には直接、空間そのもので実現された。風景の追求の歴史的変遷は芸術諸分野にみられ、相互に影響を与えたと考えられる。しかし、その歴史的変遷を証明することは本論の目的ではなく、既にこれまでに取り上げられていることである。ここで述べようとする風景の知覚は近代において、様々な芸術分野で追求され、人々の風景の概念となったものである。19世紀後半にラスキンを始まりとしていくつかの風景論が著わされている¹⁴⁾。ラスキンにおける風景概念の定義は絵画で行われた歴史的な風景の追求を比較し、風景概念の本質と断片的内容を見出すことで成り立っていると考える¹⁵⁾。

近代と風景の知覚との関係は近代市民社会の市民階級に風景画が受け入れられたことに示される。高階秀爾は¹⁶⁾「風景画に対する関心は肖像画に対するそれと同じく、大革命（フランス）以後、社会的、政治的新興勢力としてクローズアップされるようになってきた市民階級の趣味を反映するものであった。」と述べている。これはイギリスとオランダの風景画にも言うことであろう。イギリスにおいては17世紀の市民革命、18世紀の産業革命によって市民社会が確立するが、コンスタブル、ターナーの風景画が市民社会の時代に出現してくる。何故、市民社会において風景画が受け入れられたかを推論すれば、高階秀爾が指摘するように¹⁷⁾「彼ら（市民階級）にとって受け入れることのできた芸術様式とは、高度の教養と洗練された感覚を必要とするものではなく、見てすぐわかる写真的なものであり、しばしば通俗的なものであった。」ので、日常、目にしている外界そのものに関心が持たれ、そこで風景画が受け入れられた理由の一つがあるといえるのであろう。日常の外界の諸事物、諸現象への関心と究明は一方、近代科学の発展の出発点であり、様々な意味の近代の出発点を

持つといわれるルネッサンス期には、風景画の発祥も、近代科学の発祥も見出すことができるといえる¹⁸⁾。このルネッサンス期に見られるように、個々人の主体の自覚があり、それが外界への関心へと向かったといえる。とともに知覚における主体と外界の関係を知覚する者と知覚される対象として結合する知覚法則が探求されはじめたと考えられる。個々人の主体の自覚は市民を主体とする市民社会の形成の精神的な基礎となる理念である。そこで、市民社会で主体の自覚がある点も風景の知覚を成立させる要因の一つであるといえる。主体の自覚と外界への関心において知覚法則の探究が継承され、より深められてきたと考えられる。イタリアからオランダ、さらにイギリス、さらにフランスの風景画の連脈もそれぞれの市民社会の背景を有したと考えられる。勿論、一つの社会の中にも様々な思潮があり、風景画への関心も様々な思潮の一部であったことも確かであろう¹⁹⁾。

ルネッサンス期には風景は絵画の中の主題とは描かれず、部分的な背景として描かれ²⁰⁾、透視図法も風景全体には適用されなかった。「風景が主題であるような絵画、それが風景画である。この意味での風景画が最初に登場するのはルネッサンス、とりわけ16世紀のフランドルにおいてであるが、絵画の一分野として地位が確立して、それがいわば市民権をえるのは17世紀である²¹⁾。」のであり、「風景という言葉、landscape という言葉はもとは種族、領主の領土の単位といった意味で、16世紀末、風景画の影響によって、眺めのひとまとまりとしての landscape の概念が生じた²²⁾」といわれている。透視図法は風景全体に適用されるようになり、外界の視覚範囲として風景が知覚されるようになってきた。ヴェルフリンは²³⁾「近世美術の全行程はクラシックとバロックとの二つの概念に従属せしめられている」として、16世紀と17世紀の美術を対照して、その諸局面を対比しているが、その一つに「平面的なものから深奥的なものへの発展があった」とし、近景は至近景にまで、遠景は無限の遠方にまで、その画面が向う動きとして構成されるようになってきたことを指摘している。これは透視図法の拡大した適用であり、知覚する主体の位置とその位置からの外界の拡がり unlimited に近くまで鮮明に意識させるものとなる。地表の拡がりの中に主体は位置し、その拡がりを知覚する時、この拡大された透視図法において、その拡がりを眺めとして構成する手段を持ちえたといえるだろう。風景は一画面としての平面的な景色から、主体の周囲の外界を空間的、立体的なものとして知覚されるようになった。外界の空間知覚は光線と大気的作用を受ける。これら風景の知覚を構成する諸契機はさらに深く追求され、その内容は一層深く、複雑になっていったと考えられる。ラスキンの風景論²⁴⁾ が画家の追求した風景の知覚の内容を集大成したといえるとすれば、それまで数世紀の歴史がある。その歴史を考察することは本論の目的ではないが、風景の知覚が近代に到達した内容とそれを構成する諸契機を見出そうとしたのである。

風景の知覚は一方は主体からの眺めであり、もう一方は外界の反映である。主体からの眺めは前述した透視図法のような知覚法則の発見とその適用によって構成される。知覚の概念は哲学及び美学によって定義を与えられ²⁵⁾、心理学によって科学的に究明された。感覚器官の諸能力が実験的に究明され、明暗や色彩の感覚の究明もなされた。主体そのものは市民社会の成立とともに近代的個人を確立するが、社会構造内部は階級的対立が生じてくる。主体の意識は強まる一方、その意識の限界や挫折が認識されるようになる。主体からの眺めと外界の反映の両側面は知覚では統一されながら意識では一致を見出すことが難しくなる。それ

それぞれの側面は取り出されて追求され、外界は科学的に探求され、諸現象が科学的に理解されるようになった。物質界の諸性質と因果関係の法則性の認識は自然の連環性と力動的関係を鮮明な客観的現実として意識させるものとなったと考えられる。また、産業と商業活動は盛んとなり、地理学上の発見も行われ²⁶⁾、人々の移動する機会と範囲は大きなものとなった。その広がった世界の中で人々の移動は自由となり、主体は知覚しようとする範囲を意識的に選択できるものとなった。地表上に見出される諸変化、各地域の特色はフンボルトとリッターによって体系的に究明され、地理学が確立されたといわれる²⁷⁾。この地理学の知識は外界を科学的、総合的に認識させるものとして人々に作用する。ラスキンの風景論の著作は²⁸⁾ 1843年から1860年にかけてイギリスで出版されており、フンボルトの著作は²⁹⁾ ほとんどこれと並行した1845年から1858年にドイツで出版されている。ラスキン 以後の風景論³⁰⁾ には地理学的知識を援用するものが多くなっている。産業活動の活発化は外界そのものを改変していくものであり、産業革命以後、多くの工場が出現し、人口集中がもたらされ、社会構造は大きく変化していった。土地利用の点では農業的土地利用の変化が生じ、工業的土地利用と都市的土地利用の拡大が生じた。これらの変化も経済上の価値の追求を原則として進展し、自然環境や土地利用の結果生じた景観は経済的価値は認められず、他の土地利用に改変され、喪失していった³¹⁾。地表景観の動的な変化と新たな景観の形成の一方、失われゆく景観や自然環境への愛惜によって人々は外界を注目するようになったといえる。主体の意識は現実社会と反発し、ロマンチズムと自然愛好の思潮を生み³²⁾、風景への関心を高めていったと考えられる。

以上のように風景の知覚の主体と外界の両側面の変化は近代社会を構成してきた変化の一端であったといえる。近代社会の成立の過程で風景の知覚はその内容を増し、近代的な風景の知覚を生み出してきたと言ってもよいであろう。しかし、それが生み出された過程の中に近代から現代へと進み、風景の知覚を否定する要因が生じていることも見出される³³⁾。

わが国においては欧米の歴史のように近代社会自体を生み出した過程を持たない。わが国の近代化は明治以降、欧米の文明の移入によって進められた。既に成熟した近代の技術や文化が移入されたが、近代社会の経済的基盤が生じてくるのは、明治中ば以降であった。そうした社会の変化によって、人々の意識も変化し、欧米の文化が一般に受け入れられるようになった。当時、欧米ではラスキンの著作に続いていくつかの風景論の著作がなされており³⁴⁾、詩などの文学の面でも風景への関心が示されていた。これらの傾向はわが国の人々に関心が持たれ受け入れられていった。例えば、二葉亭四迷によるツルゲーネフの獵人日記の一節の翻訳「あひびき」「めぐりあい」（明治19年）の風景描写はその端緒と見られる。国木田独歩の「武蔵野」（明治31年）、徳富蘆花の「自然と人生」（明治33年）、長塚節の「土」（明治43年）、島崎藤村の「千曲川のスケッチ」（大正1年）と近代的感覚の風景描写の含まれた文学作品が続いている。「千曲川のスケッチ」ではラスキンの著作の内容が学ばれていると指摘されている³⁵⁾。風景論については志賀重昂が「日本風景論」を明治27年に著したのが端緒で、その後、数冊の風景論が見られる³⁶⁾。これらの風景論は啓蒙的なものであり、人人が日常、周囲の外界を知覚する中で求められる風景は追求されなかったといえる。しかし、こうした風景論の著作も第二次世界大戦前のわが国の人々にある程度、関心がよせられていたといえる。ラスキンの風景論の著作も翻訳されている³⁷⁾。今日においても風景論は取

り上げられているが、現代の日本人の風景観への批判として近代化以前と以後どのように変化したのか。あるいは変化しなかったのが注目される³⁸⁾。わが国の人々は近代社会のもとで欧米の人々の風景知覚の内容との共通項を有するようになり、それを学んできたのである。欧米から学ばねばならなかった近代の風景の知覚の内容を明らかにしておく必要があるだろう。

2 考察の方法

近代の風景においては主体が外界の知覚を風景に構成しようとする時、日常の知覚が土台となっており、風景の知覚形式によって知覚に構成が与えられる。その場合、日常の知覚を以下のように理解する。感覚が³⁹⁾物質的世界の事物や個々の特性が感覚器官に直接はたらきかける際にあらわれるのに対し、外界の知覚は⁴⁰⁾「知覚においては事物や現象はもはやその多数の特性が組み合わされたものとして反映される」のであり、「現実の反映の最初の契機は感覚である。」そこで知覚は知覚する瞬間に止まるものでなく、「人間は周囲の環境とのたえまざる相互作用のうちにある。現実の数多くの事物や現象は人間の感覚器官に働きかけ、人間の脳によって、感覚、表象、感情、志向などになって反映されつつ、人間のそれらに対する応答反応—あれこれの行動をよびおこす。」知覚は周囲の環境との絶えまざる相互作用における生活過程の一断面とすることができる。人間と環境との相互作用は、人間の成長過程によって変化し、各個人の生活過程はそれを成立させている社会的土台により変化し、社会的土台も歴史的に変化している。各個人の外界の知覚もその生活過程で変化し、社会の歴史的過程に影響されている。幼児と大人、原始時代の人々と現代の人々の外界の知覚の内容は相違していることが示されている⁴¹⁾。同じ社会にあっても各個人毎にその生活過程が相違する点で外界の知覚も別個である。地域毎に、民族毎に、国毎に、各時代毎に個人の生活過程に差異を見出すことができる。一方、各個人の生活過程に作用する共通の条件、共通の社会的土台によって外界の知覚の内容に多くの共通性を見出すことができる⁴²⁾。

知覚は生活過程における主体と外界の交流の一断面と理解し、主体におけるその自覚、外界におけるその範囲は社会的土台に規定されると理解しうる。主体と外界の交流は、一断面である知覚に反映する。感覚、知覚、生活過程、社会的土台は外界から主体、主体の活動から社会へと連なる交流のそれぞれの断面であると理解され、それぞれの断面はその交流の過程によって様々な姿で見出しうる。

以上のような日常の知覚の理解をもとに、一定の形式によって構成された知覚としての風景を概念の構造として論理的に考察していこうと考える。まず、知覚は主体と外界の関係によるものである点から風景の知覚は主体と外界の両側面をどのように関係づけた意識構造であるのかをⅢ章に考察する。生活環境の内部にある主体はその内部のどの位置にあるかによって知覚が限界づけられているが、環境と知覚する位置との関係を空間的、時間的構造としてⅣ章に考察する。風景知覚の空間的構造は主体のどのような意識が投影することによって得られるのかをⅤ章に考察する。風景の知覚における外界諸事物はどのような知覚像として示しうるのかについては次に予定している考察(Ⅱ)で取り上げることとする。以上によって、風景概念を論理的に考察し、概念の仮設的な構造を組み立てていこうと考える。

III 風景概念の意識構造に関する考察

風景は日常的な外界知覚の一部であるが、近代において示された風景への関心によって、諸芸術において追求され、創造された結果、高められた内容と客観的に示しうる形式を有するものになったと考えられる。ここではこの風景の知覚内容を構成する意識の基本的な構造を考察していこうと考える。まず、風景の知覚内容は、主体の意識の内的側面と対象となった外界の側面から理解される。知覚の両側面の主体と外界は生活過程において広汎に交流し、知覚はその一部である。風景知覚は生活過程に含まれる一つの場面で、その知覚の内的側面と外界側面を一定の知覚形式が結合している。風景知覚が多様な外界を統一的に把握するのに応じて、個々の知覚形式を組み合わせ総合的な形式を構成していかなければならない。

1 風景知覚の外界側面

外界は人間の活動領域の拡大と認識の深まりによって広げられている。近代に至って社会の活動領域は広がり、地球上の範囲に及ぶようになり、科学の進歩によって外界諸現象への理解は深められた。この外界の認識は各個人の知識となっている。この広い知識に対して主体の知覚は一地点から限られた視野の範囲に及ぶにすぎない。外界像は諸事物からの刺激により感覚が生じること起因するが、意識のもとで知覚として反映する。その場合、知識は外界像の理解を深める上で知覚に影響を与える。人間の意識は外界との絶え間のない交流によって、諸事物の特徴を把握し表象や概念を生み出し、これによって高次の認識を行なっている⁴³⁾。

風景は一地点から外界の広い範囲を様々な事物の全体として把えた知覚である。その知覚は主体の位置する地点から遠方へと及ぶが、遠方の知覚は視覚によって行われる。諸感覚は複合して外界を知覚するが、風景の知覚は視覚が大きな役割を果たしている。視覚から風景の知覚を把えた場合、外界の広い範囲は視野として知覚される。視野の中の諸事物は視野を分割している部分として知覚される。視線は個々の事物やその細部に注意を向けるが、細部や個々の事物は有機的關係や特徴によって、一群の量塊としてまとめられ、その量塊相互の構成によって全体が知覚される。風景の視野の全体の構成部分を風景要素と呼ぶなら、要素は分割された視野の一部、個々の事物とその量塊、諸事物の概念と類概念のいずれか、あるいはいずれもが重複して意識されるものといえる。外界事物を抽象する点で風景要素は古代の自然観における自然の要素と似たものとなるが⁴⁴⁾、科学的認識において地理学の諸分野が外界諸事物の分類に基づく諸要素であり、風景要素と一致すると理解される。主体が科学的態度で外界の諸事物における因果関係、それらの諸法則を見究めようとする時、科学的知識に基づいて要素が組み立てられ、諸事物相互の秩序、要素の相互関係が科学的法則で理解されて、風景を知覚することができる。風景の知覚は主観に左右されるが科学的態度は知覚の内容を外界の科学的客観的な認識に結合する。これまで数々の風景論に上げられた風景要素⁴⁵⁾は大気、水、大地、植物、動物、人間であるが、これらの項目も地理学の諸分野に対応しており⁴⁶⁾、その知識が含まれている。これらの項目は知覚であり、科学的認識として外界が区別され、対立し合う要素としてとり出されたものであり、こうした項目以外に生物対無生

物、人工対自然、有機物対無機物、固体、液体、気体のような要素の項目を上げることができる。

風景画は戸外の人間生活、大地、空、植物などの要素を構成し、構図として描かれる。風景画に見るように風景は限られた風景要素で外界が知覚されるので、場面毎に多様な事物の知覚も単純となり、風景を構成する要素も大地と天空のように定常的に知覚され、拡がりのある場面に風景を定置しうようになる。風景は定常的な風景要素で構成されたものと考えた場合、その構成のもとで風景要素は様々な姿を現し、風景要素相互の関係も多様な変化を示す。風景の知覚は風景要素相互の衝突の関係で鮮明となる⁴⁷⁾。風景の場面を風景要素の動的变化と相互の衝突の一時の断面として凝縮させて見る時、要素の力学的関係を要素相互が緊張をはらむ風景の劇的な構図とすることができる。風景要素の様々な姿も要素の衝突によって出現した要素の局面と見る事ができる。限りなく複雑に数多くの事物が存在する外界を全体に総合して知覚するために、風景は風景要素の構成、要素相互の衝突の端的な姿でそれを実現している。要素の衝突の端的な姿は光と事物、空と海、空と大地、風と波、波と岸などを上げることができる⁴⁸⁾。こうした要素の衝突の姿は構図上の要素の比重、相互の形態で示され、人々の意識に外界の変化を強い衝撃として与える。外界に生じる諸要素の衝突は科学的に究明されることで法則的に理解される。今日、科学的知識の普及によって、風景要素のそれぞれは多くの知識が集積されており、要素相互の関係も同様で、風景は日常、理解し易くなった。

風景の場面は一時点の一視点から知覚される外界範囲であり、地表上の一定位置にある主体とその周囲の諸事物との関係と言いかえることができ、主体も含めた場所の状態に主体の位置と場面の知覚が規定されている。地理学において景觀の概念は⁴⁹⁾「場所的関連にある諸現象の総合であり、とくに形象として視覚によってとらえられるものである。」といわれる。景觀が地理学の科学的概念として風景と異なる点は風景におけるような主体の偶然的な位置と知覚条件を捨象している点である。景觀はこれを構成する要素とその諸関係として分析することができる。風景として知覚される外界の総合は諸事物の総合された形態を反映したものであるから、景觀あるいはその部分を反映しているといってもよい。しかし、風景は景觀とその部分を反映しうる知覚形式が条件となる。主体の意識状態と主体と外界の空間的位置関係によって知覚形式が成立する。そこで、景觀は客観性を有するのに対し、風景からは主観性を離すことができない⁵⁰⁾。景觀は客観的に把握できる地表と場所の固定的な特徴に注目するのに対し、風景は目前の諸現象を諸要素の動的關係として捉えているにしても、風や光線、動物の動的要素や要素の変化の状態に注目する。

2 風景知覚の内的側面

風景知覚の内的側面は外界の反映である知覚像が意識の状態によって変化することに注目することで明らかにされる。外界の反映であるような知覚像を意識すること自体が一定の意識の状態と⁵¹⁾。この意識の状態は外界への注目と外界からの印象の両面が一定のバランスを持って成り立ったものと考えられる。そこで、この両面から明らかにしていこう。

視覚とその対象範囲との関係は「眺め」である。「眺め」は主体が眺めることによって、眺められる対象範囲から得られた視覚像である。「眺め」の対象範囲には諸事物が存在し、

その中の注目する事物を中心にして視野が広がり、視野を画面として構図的な関係が生じる。注目された事物を主景とすれば、主景を中心に空間の前後左右に前景、背景、添景が構成される。風景は開放的な広がりで天空、大気、光、大地の風景要素が常在し、これらの要素が空間全体を構図として関係づけている「眺め」ということができる。

「眺め」における注目は「眺め」が印象的であることによって、より注意力を集中したものとなる。「眺め」は外界への注目と外界からの印象から得られるが、集中した注意と強い印象は視野を狭め⁵²⁾、広い視野全体の景の構成は喪失してしまう。場面や事物の知覚はイメージあるいは表象として記憶され、意識内部の作用か外界の刺激によって再生される。眺めの印象によっても過去のイメージや表象が記憶から呼びさまされ、連想が生じる⁵³⁾。この連想が次々と他の連想を生じさせると現在の「眺め」からの印象から意識が遠ざかる。意識内部に記憶された連想のイメージは過去の多くの体験が重合しており、感情を伴うものとなる。連想やそれに伴う感情を生じさせる「眺め」の印象は主体の日常生活の流れと場面と関連して生じてくる。

外界の多様な事物とそれらを構成して知覚する風景の「眺め」は注意力の集中が必要であり、注意力の集中を保たせる程「眺め」の印象が強くなければならぬ。「眺め」の印象が強い場合、この印象が連想をひきおこし、連想のイメージによって「眺め」の印象はより強められる。あるいは連想が意識を支配すればその「眺め」の印象は薄められる。ある限られた事物や要素にのみ注意が集中した場合、視野と空間の全体は知覚でき難くなり、風景の構成は失われる。

3 風景概念の意識構造

風景知覚における外界側面と内的側面について考察したが、各側面の意識が関係して風景の知覚が成り立ってくる。風景を概念的に把握する場合、概念と概念の関係として捉えられる。これは知覚の両側面を作り出し、その側面に反映する契機となる概念の位置づけによってなされる。すなわち、それぞれの側面の契機は知覚場面の外界の反映を離れた内的意識と主体の意識への反映を離れた外界そのものである。風景は主体の外界に対する意識であるので、この両契機からの関係は風景概念を意識構造によって示すものとする。

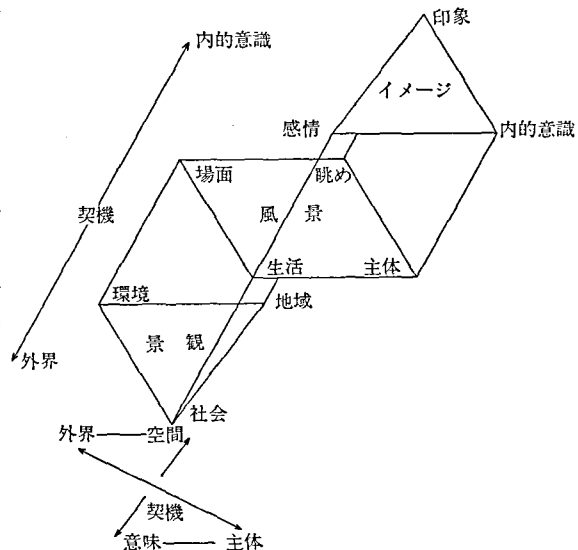
内的意識と外界の両契機の関係で風景の知覚を位置づけようとする時、外界の契機は知覚にとって空間的広がりをもっており、これは眺めである。眺めにとっての外界は場面である。内的意識の契機は外界の知覚にとって外界事物を、意識の契機は外界の知覚にとって外界事物を意味づけており、意味づけている内的意識は生活過程を反映して生じる。生活過程を反映した意識でなされる意味づけはその生活の中心として主体の意識を見出しうる。風景は主体を中心にした空間を構成した眺めであり⁵⁴⁾、眺めに対する主体がより強く意識されている。そこで、風景の知覚を構成する契機は内的意識と外界、空間と意味であり、風景概念は主体と場面、眺めと生活の概念の相互関係によって構成される。

外界の契機は風景知覚に場面を生じさせるが、場面は主体によって選択され風景と意識されたものであり、それは外界の限られた局面と言いうるものである。風景と意識される外界の諸局面の全体は主体にとって環境としての関係を持ったものである。しかし、この環境の主体は個人ではなく社会であり、個人の活動が社会を構成しているとともに、個人の生活は

社会の構造に規定されている。一定の社会集団の活動範囲は地域であり、環境内の眺めの諸場面は地域内に限定される。環境の全体を総合された内容として反映するような風景の知覚もありうる。この場合、知覚に反映している外界は景観と認識される。景観に見出す環境の総合は一定地域の範囲で社会と環境の歴史的な相互作用が生み出したものと理解される⁵⁵⁾。この景観の全体あるいはその端的な局面が知覚に反映し、風景を意識させるということが出来る。その場合、景観の範囲となる地域は眺めを限定し、景観を生み出す主体の契機となる社会は個人生活の立場をその部分に限定し、環境として関係する外界の部分に知覚の場面が位置づけられる。風景の知覚によって客観的の真実にあるような外界に到達するには、外界の契機によって知覚が成り立っていることを意識しなくてはならない。そうした風景の意識構造に以上のように景観の概念が関係づけられる。

内的意識の契機は知覚する空間の中心にある主体を意識し、知覚を意識的に構成しようとする点に關係する。前述したように眺めは内的意識に印象を与え、印象は連想のイメージを惹起し、イメージは生活体験と関係した一定の感情を伴う。このような場面の知覚と内的意識に生じるイメージとの交互関係が風景の知覚を生み出す。風景の眺めは広い視野をもち、印象はその全体から与えられる。その眺めから生じる様々な印象は様々なイメージを生じさせる。その様々なイメージを構成した全体的なイメージが、眺め全体の印象とされる。風景の知覚が生活過程の一断面とする理解から、全体的なイメージは生活体験の断片的イメージを構成し、これによって生活過程を知覚像として意識させるものということができる。

さて、以上のように風景の意識構造の外界の契機には景観の概念が関係し、内的意識の契機にはイメージの概念が関係している。風景の知覚は外界の契機が場面と空間の契機で、内的意識の契機が主体と意味の契機で拡がり、それぞれの契機は場面と眺め、主体と生活の概念で示され、風景の知覚を関係づける概念となる。主体の意識によって客観的の外界を全体的に知覚する内容をもつ風景の概念は意識構造全体に関係し、イメージの概念と景観の概念に関係づけられなくてはならない。風景の知覚に關係する場面と眺め、主体と生活の概念があるが、眺めが印象となり、生活が感情から意識され、主体を意識した内的意識を有するイメージの概念と場面が環境に位置づけられ、眺めが地域の広がり部分か全体にあるように意識され、個人的生活過程が社会の活動に含まれたことを意識した風景の概念によって、イメージ、風景、景観の各概念が関係した構造を図一1のように示しうる。



図一1 風景概念の關係構造

4 風景の総合的知覚形式

風景概念の意識構造を関係する概念で示したが、風景の知覚はそうした意識構造を反映し、構成されたものとして示されねばならない。これは知覚の法則性とその構成原理によって実現されうる。知覚の法則性は一定の空間関係において外界の刺激と意識に生じる反応が結合したところに示され、この空間関係をここで知覚形式と呼ぶことにする。風景の知覚を実現するにはこの知覚形式を構成する。風景の知覚形式の構成を総合的知覚形式と呼ぶことにする。

歴史的に見るならば風景の追求はこの総合的な知覚形式の創造とともになされてきたといえる。総合的な知覚形式はルネッサンス期に創出された透視図法が画期的なものであった。外界の広がりや主体との関係で知覚するため様々な知覚形式とそれらの総合的な知覚形式が追求されてきた。現在では知覚心理学の分野で知覚形式の分析的究明がなされている。

風景の総合的知覚形式の各構成要素について樋口は以下のように整理している⁵⁶⁾。「日本風景美論の上原敬二は眺望の性質を説明づける重要な要素として、次の五つを上げた。①視点、②視界、③方位、④主景、⑤距離。また、カリフォルニア大学の R・B・Litton, Jr. は、ランドスケープを分析する因子として、次の六つをあげた。①距離、②視点の位置、③形態、④空間の形、⑤光、⑥シーケンス。……著者はこれらの説を参考にしつつ、ランドスケープの視覚構造すなわち眺望の性質を明らかにする視標として、次の八つの視標を設定した。①可視・不可視、②距離、③視線入射角、④不可視深度、⑤俯角、⑥仰角、⑦奥行、⑧日照による陰陽度。」これをさらに整理して考えてみると、視点、視界、距離、空間の形、シーケンス、視線入射角、俯角、仰角、奥行は主体と対象との視覚関係であり、方位、光、日照による陰陽度は知覚に介在した光線的作用である。主景、形態は対象への注目と対象の状態であり、可視、不可視は認識の範囲と知覚の範囲との関係といえることができる。奥行すなわち空間の手がかりに関してはギブソンが整理しているが⁵⁷⁾、視点、距離、空間の形は奥行を構成する要素であり、視点と対象の視線角度の関係は対象にとって視線入射角となり、視点にとって俯角、仰角となる。主体と対象空間との関係は奥行とシーケンスで知覚される。奥行は透視図法で三次元の空間を二次元の画面に結合する。奥行の距離の軸では遠景に近景を重ね合わせて画面に結合する。前方の距離の軸に沿う移動—前方への進行は奥行の空間を次々連続（シーケンス）させ、遠景が近景となり、マクロな遠景の広がりやミクロに拡大された近景を結合して知覚させる。可視と不可視の関係は可視なる対象は知覚されるのに対し、不可視の対象はその存在が認識されるだけである。知覚された対象は認識しうる全体の一部かその表象といえることができる。可視の部分は対象全体の正面、表面、形態であり、これに対し、不可視な存在は裏面、内面、内部組織や機能で認識される。風景の眺めはミクロな肌理や事物は遠景の中で集合したマクロな要素に秩序づけられ、それらの要素は構成され、部分を全体に統合したものであることを前述した。眺める主体、眺めの構成、眺めと主体の関係によって風景の総合的知覚形式が構成されるといえるが、これに前述の知覚諸形式が含まれる。すなわち、風景の総合的知覚形式は表一1のように示すことができる。主体にとって知覚されうる表面や形態は認識された内面や機能と関係づけられる。眺めはミクロとマクロ、部分と全体を関係づけたものとして構成される。主体と眺めの空間関係は視

点からの眺めの奥行と奥行に向って前進する視点の移動によって生じる。眺めの奥行は透視図法によって三次元空間を二次元画面に関係させ、前方への見通しによって遠景と近景を関係させる。視点の移動は個々の視点からの眺めを連続した眺めへと関係させ、さらに遠方の全景と視点の置かれた前景場面を関係させる。

主 体 の 認 識	空 間 関 係		眺めの構成
	視点の移動	奥 行	
機 能——形 態	全 景——場 面	2次元——3次元	全 体——部 分
内 面——表 面	連 続——景	遠 景——近 景	マクロ——ミクロ
風景知覚			

表一1 風景の総合的知覚形式

次に風景の総合的知覚形式を構成している知覚形式相互の関係が問題である。主体をとり囲む外界は主体の生活の環境であり、知覚の対象範囲は生活環境の一部である。主体の生活は環境との交流によって成立し、主体が環境に適応し、改變していく生活過程で、環境を知覚し、認識する。風景の総合的な知覚形式の意識的な構成に生活過程で深められた環境認識が反映する。風景の要素は眺めを構成する部分の形態であらわれ、要素は事物の形態が集合し量塊となったものである。環境を構成する事物は主体の生活への作用因子として認識される⁵⁸⁾。そこで事物の形態の知覚に事物が作用の機能を内在しているという認識が反映する。風景知覚の形態的構造と環境の認識は事物の形態的側面と機能的側面を強調して組み立てられ、相互に反映し合うといえる。

風景の知覚は諸感覚を総合しているが、遠距離の事物は視覚を中心に知覚される。視野を二次元の画面と考えればその画面に風景の諸要素が緊張した関係で構成され、風景を意識することは前述した。画面に見られた要素の構成は視野の範囲にある外界自体が要素の関連と全体的まとまりを持っていることの反映と認められる。風景の画面の上下の要素は大気と地表となる。外界の三次元の空間で地表は水平面の広がりを持ち、その上部を大気が満す。地表は地質、地形の变化、植生の变化、人間の作用が見出され、それらの諸要素の変化は要素が相互に関連し合って展開する。地表は水平的広がりを有している点で主体の眺める位置で限られた知覚範囲しかえられず、移動によっても視角が変化し、一定の知覚像はえられない。また大気と光の変化は短時間で知覚像を変化させる。しかし、天空は太陽、月、星の宇宙の運行がどの地点からも同じように、一定の周期で見出され、陽光、大気、地表の諸要素の変化を周期的なものとしている。主体は生活過程の様々な知覚像と体験を重ねさせ、一定の生活環境像を認識し、地域の特徴を意識する⁵⁹⁾。地域の特徴を意識させる要素の諸変化、要素の相互の関連を含む風景が見出されるようになる。

視野が地域全体に及ぶ場合の風景を全体的な風景と呼ぶなら、環境の部分的関係を視野に含む風景は部分的な風景ということになる。部分的な風景は全体的な風景の地表の一部にその場面が配置されていることが見出される。生活環境の全体は生活過程の個々の場面からな

っており、個々の場面は部分的な風景の知覚と関係している。部分的な風景はその場面が全体的な風景の地表の一部に配置されているので、その場面の配置関係は全体的な風景を構成する要素となり、全体的な風景は諸場面の配置関係の知覚によって環境全体の認識に接近できる。

風景の部分と全体、場面と全景の関係は知覚の空間関係で距離がそれぞれの知覚を決定する。全景を知覚するには全景が視野の限界の角度に収まるだけ距離を隔てねばならず、場面は主体の位置を中心とした周囲全体で接近した部分から場合によって遠方への広がりを持つ。部分の風景は全景に比べ接近した距離で知覚される。すなわち遠景は全景を知覚させ、近景は場面の知覚に伴い、部分的な風景を知覚させる。相対的に遠景は二次元画面で知覚され、近景は三次元空間のひずみをもって知覚される。相対的に事物は遠景でマクロに知覚され、近景でミクロに知覚される。あまりに遠景となって風景要素を構成する諸事物が判別できなくなるのに対し⁶⁰⁾、接近しすぎた近景は要素の構成が知覚されなくなる。遠景を知覚する距離と近景を知覚する距離の間に全体の構成を持ち、要素が諸事物で構成されたことが判別できるような知覚が得られる距離がある⁶¹⁾。こうした距離からの知覚を中景とよぶ。この中景は遠近の異なる知覚内容を結合し、総合的な知覚形式を有しており、風景の概念に当てはまる。近景から主体に接近した範囲は事物と接触でき、直接、行動と関わる環境の場面といえることができる。主体を中心とする同心円の広がりや距離の関係があり、同心円の中心に関係する知覚——環境の場面、事物に対するミクロな知覚、三次元空間、近景、部分的な風景——が知覚に常在している。この主体を中心とした知覚範囲の外縁に中景が、さらに外縁に遠景の知覚範囲がある。そこで遠景にとって中景が、中景にとって近景が前景となり、近景の部分はどの場合にも介在している。眺めは対象とする外界とこれに対する主体の位置、位置の状態の空間関係を構図として示す。主体を中心とした知覚の範囲は多様な事物、事物の多様な変化が存在し、その知覚内容も常に変化する。これに対して遠方は視覚的に事物のマクロな形態が知覚され、相対的に不変である。風景は主体の位置する部分の変化し易い知覚内容と不変な遠方の眺めを対置し、関係させる。すなわち近景から遠景への空間の連続によって関係させ、遠方の全景の部分を構成する場面の配置と現在の場面とを対置させる。

主体と外界事物との距離関係は主体の視点と主体の位置の移動によって変化する。あるいは外界事物の移動によっても変化する相対的關係で距離関係を把握することができる。移動によって主体からの外界事物の距離、視角、注視対象そのものも変化し、空間全体が運動するように知覚される。注視対象を固定しながら主体の位置を移動する場合、前方の注視対象は接近し、進行側方の注視対象はその注視対象を中心にし主体とより遠方の事物が水平に回転しているように知覚させる。遠方の事物を注視しながら移動する場合、近景から遠景に連なる地面全体が遠景の注視点を中心に大回転するように知覚される。無限に遠い空の星、月、雲、太陽、遠方の山岳は移動による視角の変化が近景にくらべてはるかに少いので、移動に平行して進行するように知覚される⁶²⁾。注視対象を移動しつつ、主体も移動する場合、近い注視点を中心にした回転が継起的に生じるとともに遠方の注視点を中心にした大回転も生じるように知覚される。この回転の大きさは視角の変化の差となって遠近を知覚させる。立体的な事物は移動によって知覚される側面、角度が変化し、立体感が強調される。奥行きも移動による視角の変化で強調される。このように移動は立体感、奥行を強調し、接近によって

遠景を近景に、マクロをミクロに、二次元を三次元に、全体を部分に連続した変化で知覚させる。さらに眺めの変化ばかりでなく、場面の移動によって次の眺めへと移っていく。

以上のように風景の総合的知覚形式は知覚形式相互の関係によって構成される。

IV 風景の場面構造に関する考察

風景は外界諸事物を視野の範囲で総合した知覚像であったが、風景の知覚は主体と外界が空間関係を持つ場面に生じたものである。とくに主体の視点位置から知覚される点で視点位置の選定が場面を決定することになる。風景の視点位置の選択は外界との空間関係が総合的知覚形式に反映しうることを前提にしている。その空間関係は遠方と周囲に広がる視界であり、眺望の得られる視点である。風景の場面が生活過程の一場面と理解すると、知覚の範囲は生活環境の一部分、一側面であった。

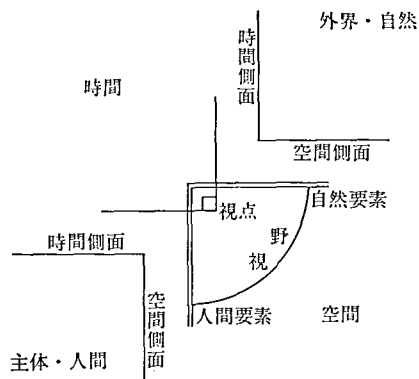
1 風景の場面構造

生活環境と生活過程を空間と時間の両側面で見ると風景の場面は生活過程の一時点であり、視点は空間の一位置であり、視野の対象範囲の外界は空間的広がりを持つ。生活環境の空間的側面を生活空間とすれば⁶³⁾、主体の視点位置と知覚範囲は生活空間のある位置と部分的広がりとなる。主体の個々は社会的存在であるから、個々の生活空間は相互に関係し、社会的諸活動の空間に含まれる。自然界は人間の諸活動とくに社会的生産諸活動によって改変され、その改変が歴史的に集積し、生産活動の基盤となる環境や資源として機能することで社会的諸活動の側面となる⁶⁴⁾。そこで生活空間には個々の生活、社会的諸活動、自然界の諸作用が相互に関係して見出される。各々の活動の空間的側面を生活空間、社会空間、自然空間とよぶことにすると、風景の知覚においてはこれらは外界事物の形態を集合して見出した風景要素と一致する。風景要素として各々の活動の空間を見る時、空間相互の関係は作用と反作用の関係で把握される。風景を知覚する主体は生活空間の主体となるから、生活空間とこれに対置する空間との関係は主体から延長した活動がその外界に作用し、外界からの反作用を受けるものと意識される。生活空間、社会空間、自然空間は主体の活動から次第に隔たった外界として延長され、同時に相互に対立し合っている。自然界は相対的に主体から隔たった人間諸活動の対象としてあると同時に、対象化され尽くさない不可知な部分を含む存在であり、自然要素は人間要素に対置される。

風景の場面は時間側面と空間側面、空間側面における主体と外界、視野における人間要素と自然要素の関係で把握することができる。この関係構造を図一2に示した。

2 場面の空間階層と時間階層

地理学における景観の概念は⁶⁵⁾「場所的関連にある諸現象の総合であり、とくに形象として視覚



図一2 風景の場面構造

にとらえられるもの」であるが、場所的関連にある諸現象は前述の社会的諸活動と自然界の諸現象であり、それらの総合が地表上の形象として、すなわち空間側面で示されたものといえることができる。空間側面で景観の総合が視覚にとらえられるものとすれば、景観の範囲は視野に限界づけられる。一方その総合を構成する社会的諸活動と自然界の諸現象は知覚の範囲とその限度を超えた様々な空間階層で生じ、相互に関係している。風景の知覚は近景と遠景を構図的に関係させるが、近景はミクロな現象が、遠景はマクロな現象が知覚され、ミクロからマクロの空間階層を秩序づける⁶⁶⁾。そこでは外界の空間階層が知覚の空間階層によって扱えられる。

外界の空間階層は現象の量的関係を反映し、ミクロな現象の量的な集積がマクロな現象を構成して階層を秩序づけたものと考えられる。そこで一定の空間範囲ではミクロな空間階層の多数の現象が多様にあるいは反復して存在し、マクロな空間階層の現象は少数で限られたものとなる。知覚の空間階層は一定の視角で近距離の現象は小範囲で、遠距離の現象は広範囲で扱えられる。一定の空間階層は近距離で視角が拡大し、遠距離で視角が縮小して知覚される。そこで近距離で知覚されるミクロな空間階層の現象の数は限定され、遠距離で知覚されるマクロな空間階層の現象の数は増大する。ミクロな空間階層の現象は遠距離でマクロな空間階層の細部となり、さらに遠距離となると知覚から消失する。風景知覚の外界の総合は遠方で縮小されたミクロな現象を細部に含み、場合によってはそれを消失したマクロな現象の知覚と近距離で拡大したミクロな現象の知覚が前方から後方に連続し、あるいは不連続に重なって関係づけられる視野のえられる視点を選択することによってえられる。外界の総合に関係する生活環境が一定の空間範囲を有している点に注意すると、その空間階層におけるマクロな現象は限られており、そこで遠景は一定の知覚像を示す。このような遠景の地域の知覚像の全体あるいは部分に対し、主体がどのような空間関係を有しているかを示す近景とその視点をうるることができる。遠景に対し近景は相対的に多様で多数の反復したミクロな現象の知覚であるから、近景の様々な選択は多様な風景を知覚させる。マクロからミクロの空間階層は外界諸要素でそれぞれの階層性が独自であり、諸要素の相互関係も複雑な階層性であられる⁶⁷⁾。遠景から近景にいたる知覚の様々な空間階層で構成される風景はこれら外界諸要素とその相互関係の多様で複雑な空間階層性を反映したものとなる。

現象の時間側面からはミクロな現象の量的集積のもとにマクロな現象が生じる場合、両現象間には集積のための一定の時間的關係を伴い、両現象の空間側面に見られる不整合は次に生じる関係の変化を予告する意味を持ち、その動的関係を知覚しうるものとなる。外界事物の時間側面も階層性を見出すことができ、事物のくり返される運動の始りと終りの時間が一定である場合、周期性を持つといえる。とくに太陽系における地球の運動の周期性は地表の諸事物の運動に影響を与えることが多い。それらの周期性も階層的に連関してくる場合がある。あらゆる要素は時間側面で階層性を持ち、場合によって周期性をもっており、要素相互の関係は複雑な時間関係を生じさせる。このような時間関係は瞬間の知覚では扱えられないことが多い。事物の運動の法則性と周期性を認識し、要素と要素相互の動的関係が生じうる時間を選択すること、あるいは空間側面で運動の不整合を意識することによって知覚することができる。

空間側面と時間側面を持つ風景の知覚の場面は生活過程の途上に見出すことができ、様々

な場面を見出し、連結し、反復する場面相互の関係も見出すことができる。風景の総合的知覚形式で述べた空間関係はその場面の位置を知覚の空間階層と外界の空間階層の関係で把握される。場面における知覚の内容の点から言えば近距離の範囲の知覚は主体の位置の状態を反映している⁶⁸⁾。主体の位置はその行動に伴い、位置の環境は主体に直接作用する。一定位置は主体の行動の瞬間断面であり、行動は生活過程を形成する一部とすることができる。生活過程とこれに関係した外界諸事物の運動の時間側面で階層性があり、この各時間階層の運動の瞬間を風景知覚の場面の位置を決める上で選択する。短い時間階層に生じる運動は空間に生じる変化として知覚される。生活過程は社会的諸活動と自然界の諸現象に関係している。生活過程と環境に関係する外界諸要素とその相互関係の空間階層、時間階層を科学的に認識することによって、風景の知覚をより総合的に構成することができ、その場面の位置を意識的に選択することができる。

3 場面の主体契機

風景の知覚の場面で空間関係における視点と眺めを構成する主体意識として主体の契機が作用している。さらに場面の位置も主体の生活空間の一部に選択したものといえる。主体の視点と視野の対象空間が生活空間内に位置することは両者が生活過程で連続し、主体の活動の延長として対象空間を意識することができる。主体の環境に対する関係は改変と適応の両面がある。主体が環境をより多く改変することで、生活空間は主体の意識を反映して創造される。環境への適応は主体の位置、活動の限界を意識させる。環境の広がりにつれ、個人の活動は社会諸活動を媒介としなくてはならず、マクロな自然界への作用も社会諸活動によって行われる。各個人は社会的個人として社会に位置づけ、その社会の環境に適応している。社会諸活動とマクロな自然界へのその作用を主体の活動の延長と意識する場合は各個人が社会の主体となって実現する。空間側面では各人の生活空間があるが、一般的な人間を中心にした理想的な空間秩序が考えられており、これを人間的尺度と言っている⁶⁹⁾。人間的尺度に基づく理想的な空間秩序を各人の生活空間に実現することは各人の共通の目標とすることができ、それ故に社会的要求ともなりうる。このように社会諸活動の空間側面に主体契機が作用しえている。時間側面でも空間と同様な人間的尺度が考えられており、社会諸活動の時間側面に主体契機が作用しえている。

主体契機の及んでいない外界諸現象は主体に対置して、主体を従わせる環境要因か、あるいは主体の関係しえぬ疎遠な存在である。環境要因として作用してくる諸現象に主体は適応し、その好適な作用の諸現象を選択するなどして、生活空間の一部に取り入れる。主体は環境要因として作用する諸現象に受動的に関係づけられる。主体と関係しえぬ疎遠な存在の外界諸現象も他の諸現象との関連性を認識した場合に主体と間接的に関係することを見出しうる。主体契機から生じえない自然界の諸現象は相対的に主体に疎遠な存在ということができ⁷⁰⁾。しかし自然界の諸現象は科学の探求によってその多くを法則的に認識することができる。自然界の諸現象の相互関係やマクロな現象とミクロな現象の階層関係を科学的知識で得られる。風景は科学的知識によって接近したミクロな現象の知覚と遠方のマクロな現象の知覚の空間階層による構図と風景要素の構成に見る現象の形態上の相互関係の構図を構成し、主体との間に間接的相互関係を見出すことができるものとなる。科学的知識は知覚される外

界諸現象とその相互関係の諸形態に注目させ、理解させる。知覚される外界諸現象とその相互関係の諸形態は主体がこれを科学的に認識する機会となる。科学的知識が増大し、外界諸現象の理解が深まるにつれ、より多くその形態の知覚に注目することができ、さらに科学的に認識しようとする機会も多くなる。風景の知覚は靈感に富み、より深い外界諸現象の認識を反映した構成とすることができ、また多くの場面に構成された風景を知覚することができる。しかし科学的知識による風景知覚の構成が主体契機から遊離するだけ、知的な構成にとどまるという限界を有している。

V 風景の知覚構造に関する考察

風景は総合的な知覚形式を持って総合した眺めであり、その眺めの場面を意識的に選択しうることを前述した。次に風景における総合的な知覚形式は主体のどのような意識を反映して構成されるのかを考察してみよう。

風景の総合的な知覚形式は主体と外界の関係として空間知覚が意識されるのに始まり、それがさらに近代になっての主体と拡大した外界の関係まで空間知覚の認識が深められたところに追求されてきたと考えている。すなわち、K. クラークはその著の風景画論に⁷¹⁾ 十七世紀の画家、プーサンは無秩序な自然の外観を論理的な形式に変えることによって知性に新しい勝利をもたらそうとし、画面における水平、垂直の二要素の調和と均衡を実現しようとし、正面性をとると同時に空間に貫き入る透視図法をとったことを指摘している。風景は絵画のように一定の画面をもたないが、知覚される範囲として外界の一部を区切り取り、この外界の知覚に総合的な知覚形式による統一を与え、無秩序な自然の外観を論理的な形式に変えたものであることでは同一である。そこで絵画と同じように風景の知覚に空間と形態を知覚する場合の論理的構成要素である垂直、水平などが含まれ、空間知覚には透視図法の認識が重要である。

空間知覚は視野の画面と主体の視点を空間的に関係づけるが、画面の事物や要素の形態は視点における主体の動作と視線の動き、諸感覚の反応によって知覚される。こうした知覚の中から一定の要素として意識されたのが空間と形態を知覚する場合の論理的構成要素である。一定の空間と形態の要素と一定の動作と視線の動き、諸感覚の反応が結合し、一定の意識を生ぜしめる。空間と形態にとって普遍的な要素がそのような論理的構成要素といえるだろう。

1 風景の知覚構造

風景の総合的な知覚形式は空間と形態にとっての論理的構成要素が基礎として関係づけられ、風景が知覚されるといえる。風景画に示された論理的構成要素は正面性、垂直、水平、変化、それらの総合である透視図法である⁷²⁾。これらは空間と形態における論理的構成要素と一致し、それぞれ主体の動作、視線の動きと関係して知覚される⁷³⁾。すなわち正面性は前方への注視、垂直は上下の視線の動き、水平は左右の視線の動き、変化は対象物の動きに沿う視線の動きである。これらの動作には運動感覚が伴い、動作の構成によって形態や空間が主体に知覚され、意識される。とくに主体がその中心にある空間は主体が進み行く前方、主体の見上げる天空、主体の立つ地面、主体の前進にとっての左右側方と主体の動作によって

構成されるとともに、その構成要素が前方画面に収れんし、遠い前方に求心性を持つ透視図法となって総合されて知覚される。風景要素の様々な形態と運動の総合は空間の論理的構成要素の座標における位置関係で知覚されることで、主体の運動感覚と意識に結合する。

ルカーチは美的反映の抽象的形式において⁷⁴⁾「一方でわれわれの自己意識の高揚、環境および自己に対する支配能力の向上をなさしめ、他方どこからその力がでてくるのか、どんな手段で作用するのか不可解なままである、ということが動かぬ事実として存在している」としながらも、抽象的形式を生じさせる根拠を生活過程におくという点で三点の理由を上げている⁷⁵⁾。すなわち、ビューヒャーの指摘する労働から、次にパブロフが指摘する生物的生存

	主 体		知 覚	空 間	
	意 識	身 体・動 作		構 成 要 素	尺 度
感覚刺激に対する反応	くらしの色あい くらしの音 くらしのにおい くらしの感触 くらしのあじ くらしのふれあい 道具 道	目 耳 鼻 皮膚 舌 身体 頭 首、顔を向ける 胴 手 足 移動	視 覚 聴 覚 嗅 覚 触 覚 味 覚	光線(色彩・形態) 音 匂い 表面 肌理 味 位置 変化	視角、大きさ 外界事物・風景要素 の性質とその強さ、 粗さ
知覚空間に対する反応	印象 せまる 引き下る 直立歩行 天空 重力・ 落下 生活空間・地面 行動 重力・浮沈	注意 横目づかい 移動 {前進 後退 立つ 仰ぐ 俯く 見渡す 左・右 移動 前後 上下 直・曲	注視 斜視 接近 後退 上 下 知覚形式 側方 接近 リズム 回転	・正面 側方 奥行 {放射 求心 ・垂直断面 ・水平面 ・変化 振動 円	視野 視角 高さ 深さ 視角 地表の広がり 巾、距離 速度
美的意識の反応	注意・囲まれる 自由・ひろがり	結 合 左・右 集中 拡散	面	直角(水平・垂直) 運動(直進・回転) 集合 均斉 垂直 水平	閉鎖 解放

表—2 風 景 の 知 覚 構 造

である条件反射から、またさらに環境内の出来事、すなわち生活体験である。そこで空間と形態の論理的構成要素が主体の意識に結合する根拠は美的反映の抽象的形式以上に生活過程におきうるといえるであろう。しかも知覚は⁷⁶⁾「ある瞬間に感覚器にはたらきかける現実の事物や現象のその様々の特性ならびに部分の総和における直観的、形象的な反映である」と述べられている点で、風景の知覚は直接的な感覚刺激への反応と条件反射、知覚空間への反応、美的意識の反応の三つの反応を構成した総合的な知覚とすることができる。それぞれの反応によって生じる意識は生活過程に根拠を持つ点で、主体の内的意識と結合するといえる。三つの反応は感覚刺激への反応から知覚空間の反応が生じ、知覚空間と感覚刺激の反応から美的意識の反応が生じるように段階づけられる。知覚空間に関係づけた兩段階と知覚空間をその相互の関係から述べておく。

感覚刺激に対する反応の段階で、刺激は光線、音、匂い、表面の肌理、味が上げられ、反応する感覚は視覚、聴覚、嗅覚、触覚、味覚であり、器官は目、耳、鼻、皮膚、舌が使われる⁷⁷⁾。感覚に対する意識の反応は日常的な主体の生存の確保に結びつき、より根源的な内的意識と結合すると考えられる。溝上は⁷⁸⁾生活主体の感覚に対する意識としてくらしの色あい、くらしの音、くらしのにおい、くらしの感触、くらしのあじ、くらしのふれあいを上げている。こうした諸感覚は主体の接近部の範囲で生じた刺激により生じることが多く、その刺激は多様であり、接近につれて倍加して大きくなる。これは前述した場面の視点位置における環境であり、主体の行動空間である。

知覚空間の反応の段階では接近した範囲の刺激に対する感覚と結合しているが、遠方の範囲からの光線と音の刺激を中心にした感覚を素材として外界を意識する。空間知覚の中心になる感覚は視覚であり、遠方に及ぶ広がり事物の形態を知覚する。空間と形態の論理的構成要素と視線の動きと動作の関係は前述した。それらと内的意識との関係は生活過程を根拠に持つとはいえるが、どのようであるかは後述するようにやはり憶測でしか示しえない。

美的意識の段階は空間と形態の論理的構成要素の相互関係に美的反映の抽象的形式を見出すことができる。美的意識は主体の複雑な内的意識より生じ、感覚刺激に対して快、不快の感情が生じるように美的な判断を与える。風景知覚は各段階に生じる内的意識や美的な判断があり、それらを総合的な美に向けて組み立てたものといえるだろう。

風景の知覚構造は知覚空間に対する反応を感覚刺激に対する反応と美的意識に関係づけて見出すことができ、それぞれの関係の各段階で刺激や空間の構成要素が一定の身体動作と内的意識との関係で知覚が成り立つことの諸関係として表一2のように示すことができる。

2 風景の知覚空間の論理的構成要素

風景の知覚空間の論理的構成要素は空間を論理的に三次元に意識しようとしたものである。しかし、その各構成要素はそれを知覚する上の一定の動作を通じて、一定の内的意識に結合している⁷⁹⁾。空間は論理的に正面、垂直面、水平面の三面の次元で成り立つ。風景の知覚空間は主体を中心として無限に広がる空間であり、主体には垂直は上下方向に、水平は左右方向にあり、遠方正面には水平面は水平線に達し、垂直面は垂直線として投映する。これらを論理的構成要素とするのだが、表一2に示している。

知覚空間にとって正面は主体が注視する方向に生じる視野であり、この正面の知覚は注意

するという動作で生じる。視野の範囲は知覚心理学で明らかにされており、注視して事物を識別するには視角が関連する。視野の範囲で風景要素の構成がある場合、風景要素の視野に占める面の割合が知覚される。風景要素の面の周囲、他の風景要素との接触は線で示される。線は風景要素間の接触で生じ、要素間の力の緊張を示し、直線と曲線がある。直線は対向する力の緊張、高速の運動によって生じる。視野の中心における注視点は正面の求心的中心であり、遠方に向う注視点は透視図法における⁸⁰⁾ 中央視線に位置し、地面に平行な注視点は水平線(地平線)にまで延長され、奥行と立体の求心点となる。これに前進、後退の移動の動作を加えると、正面の中心点から放射する奥行と中心点に求心する立体はより鮮明な動きを示す。前進と後退は事物が接近する、あるいは後退するという知覚であり、主体と事物の意識の関係では相手にせまる、あるいは引下ろすという動作で示される。

知覚空間における垂直は上下を結ぶ知覚であり、仰ぐ、俯くの動作によって得られ、その視線の移動角度が上下の高低を計るものとなる。知覚対象となる風景要素に見出される垂直は重力の作用する方向である。人間が垂直の重力方向に一致する動作は立つことであり、生活過程の基本的動作である直立歩行である。

知覚空間における水平は左右を結ぶ知覚であり、垂直面と直交し、首の回転、見渡す動作によって得られる。視線の水平な面での回転の角度で視野の広がり、事物の広がりを計る。風景要素に見出される水平は地表であり、地表に事物がひきつけられる重力の作用である。風景要素の中で水は重力の作用に従い、水平面を作る。水平面に回転する見渡す動作によって、人間が地表上にくり広げる生活空間が知覚される。主体の活動するのと同じ地表にあらわれてくるものへの注意が地表を眺める動作を行う直接の意識であろう。水平線と垂直線を座標軸として、事物と風景要素の視野における位置が計られる。地平面、水平面に対する主体の視点の高さからの視角は近距離程大きく、遠距離程小さくなることで、その距離を知覚することができる。主体を中心として水平面上の距離は次第に広がる同心円として捉えることができる。距離の知覚の手がかりをギブソンは十三種上げている⁸¹⁾。距離の知覚に主体の意識が関係していることをH、ホールが指摘している⁸²⁾。

知覚空間に見出される変化は主体の移動かあるいは対象物の運動によって見出される。変化は位置の移動方向とその移動の時間当り距離の速度で知覚される。正面の前後の移動についてはその奥行と立体を鮮明に知覚させることを前述している。上下、左右の移動は垂直と水平の方向であり、上から下への垂直の移動は重力による落下として多く知覚しうる。上下あるいは左右の反復運動は周期的な振動と知覚され、その大きさは振幅である。水面における浮沈、歩行の際の上下の振動、風による枝の振動のように生活過程に様々に見出すことができる。振動によって生じる快感はリズムである。空気を振動させる運動によって音が生じるので、音と運動の知覚は連結する場合が多い。動きに対して向けられる注意は動きの位置変化に伴って注視点が移動し、景の構成はづれを生じ、づれが連続して変化することで、空間の奥行や立体を鮮明にする。動きの様々な空間階層と時間階層によって景構成の空間諸階層はその構成を変化させる。

VI 総合的考察

風景概念の論理的構造にはまだ風景要素を加えねばならないが、これは考察（Ⅱ）に取り上げることとし、これまでの論述を総合して考察しておこう。近代の主体と外界を契機とする風景概念はどのような内容を持つものなのか、あるいは持ちうるものなのかを示そうと考えた。主体は生活過程において外界と交流しており、主体の外界に対する知覚は交流の一断面として生じる。そこで風景の知覚は生活過程と関係して意識されることを前提として、風景概念を一定の意識構造と理解した。

風景概念の意識構造において風景はどのように外界が意識されたものなのか、知覚される外界をどのように風景と意識するのが問題である。すなわち風景の知覚の外界側面と内的側面が問題である。外界側面では外界事物は風景要素に統合されることで知覚される範囲の外界を恒常して全体的なものと意識することができる。内的側面では知覚の印象からイメージが意識され、内的意識と交流して風景を意識することができる。風景を生活過程と関係した意識と考える時、外界側面と内的側面は外界と主体の交流する両契機から意識されることとなる。主体の活動の場である外界、主体の生活を体験として蓄積した内的意識及び両者の日常的な交流により、広がる活動の場とますます蓄積する生活体験の一断面と風景が意識される。こうした外界と内的意識の契機から風景を意識する時、風景の知覚は外界の一場面に限定され、内的意識は眺めにより生じるイメージに限定されている。こうした場面を外界の広がりに関係づけるか、イメージを生活過程のどの断面に意味づけるかで、風景と生活過程との関係を見出すことができる。こうした関係を概念の構造として図-1のように表現した。こうした関係を風景に実体化して見せるのは主体と外界の空間関係であり、この空間関係が透視図法として探求されており、定式化されてきた。これらを知覚形式とすれば、風景は知覚形式を意識的に構成して主体が外界との知覚の関係を作り出したものといえる。知覚形式は空間関係を通じて眺めの構成、主体の認識を結合し、総合的な知覚形式によって風景を構成する媒体となる。

生活過程の時間側面から風景はその一時点の場面である。生活過程の空間側面から風景は主体の視点と視野の対象範囲の外界の関係で構成される一定の空間範囲である。生活過程において主体の契機からその空間側面を位置づけると生活空間、社会空間、自然空間を見出すことができる。生活空間は主体の契機から生じ、風景を知覚する視点の主体と連続して意識されるのに対し、主体の契機から隔る自然空間は風景要素として生活空間に関係し、対置されるものとして間接的に意識される。知覚される空間は距離によってマイクロからマクロへと階層的に相違する現象が把握され、風景は諸階層を総合して知覚する。知覚の空間階層と外界の空間階層の関係によって知覚される現象が把握される。そこで風景は知覚の空間諸階層と外界諸要素の空間諸階層の総合的な関係としての空間知覚と言える。その総合的な関係は主体の視点位置を中心とする点でマイクロな空間階層とマクロな空間階層の構成として見出される。視点場面のマイクロな空間階層における位置選択と視野遠方におけるマクロな空間階層の関係が風景の知覚場面を見出す根拠となる。事物の運動はさらにその時間階層性の認識から見出される。場面における主体の契機は外界を知覚する中心としての主体の意識だけでなく、外

界を改変する生活主体としての意識に見出される。社会的に普遍性を持った生活主体として人間を単位として社会的諸活動を把握することができれば、生活空間は社会空間にまで拡大して認識される。これを人間的尺度による生活空間の理想的秩序として追求しうる。このように主体契機を生活過程で強調していく意識は生活空間にそれを現実化するとともに、知覚する中心としての主体の意識に反映しているといえるだろう。

外界の知覚から風景が意識されるのは感覚刺激に対する反応、知覚空間に対する反応、美的意識の反応があり、それぞれの反応が内的意識と関係して総合したイメージを生み出すからだといえることができる。その諸反応が内的意識にいかに関係するかは条件反射や生活過程がその原因と言えるが、固定的で明確な対応は示しえない、ただ反応に対応する動作と目的をもった動作との関連である程度推定しうる。風景は知覚空間への反応を中心とした意識であり、その空間が正面、垂直、水平の論理的構成要素から組み立てられることを意識することによって、空間を内的意識に反映させることができる。そうした空間の座標的構造の中で風景要素とその運動の位置が明らかにされる。論理的構成要素の強調は風景の印象の性格を作る。論理的構成要素の相互関係は複雑に総合された風景の印象の性格を作る。

風景概念の構造を論理的に展開して見るとき、外界の総合的知覚に様々な可能性を有していることが示された。各人の意識的な知覚の構成によって風景の内容を多様に生み出していくことができる。実にそれは前述したように近代の芸術によってはるかに高い水準まで風景の内容が追求された。この背景には近代の動的な社会変化による人間と自然の関係の変化があり、近代市民社会における近代的個人の理念、産業革命における技術開発と近代科学の追求とそれらへの確信、ロマンチズムの思潮を生み出していたことである。風景の知覚はあるがままの外界を反映しながら、主体と外界の契機による意識的な知覚の構成といえることができる。

注および引用文献

- 1) G・ルカーチ、木幡順三訳；美学Ⅰ，勁草書房，1968，pp. 3, 4
- 2) K・クラーク、佐々木英也訳；風景画論，岩崎美術出版，1967
- 3) 前注2) pp. 205～220
- 4) 中村一；風景，21世紀の設計 2 空間と環境，勁草書房，1971，pp. 303～323
- 5) 地域計画の一部の風景計画によって実現される。
- 6) ラスキン；近代画家論，1843～60
- 7) 前注2)
- 8) 前注2)
- 9) 今田敬一；風景論の文献（上，中，下），風景 vol. V No.6, No.7, No.8, 1938 田村剛，上原敬二，稲垣光久等の論考がある。
- 10) ブルクハルト，柴田治三郎訳；イタリア・ルネサンスの文化（下），中公文庫，1974，pp. 18～30
- 11) 前注2)，6)
- 12) 針ヶ谷鐘吉；西洋造園変遷史，誠文堂新光社，1977，pp. 236～276
- 13) S・ギーディオン，太田實訳；空間・時間・建築(1)，丸善，1969，pp. 64～209
- 14) 前注9)
- 15) 前注6)

- 16) 高階秀爾; 近代絵画史 (上), 中公新書, 1975, pp. 53, 54
- 17) 前注16) pp. 33~47
- 18) 前注10) pp. 11~30
- 19) 前注17)
- 20) 前注2) pp. 37, 38
- 21) 坂崎乙郎, 野村太郎編; 西洋の美術, 社会思想社, 1968, p. 160
- 22) 尾留川正平他編; 人文地理調査法, 朝倉書店, 1972, pp. 74, 75
- 23) ヴェルフリン, 守屋謙二訳; 美術史の基礎概念, 岩波書店, 1936, pp. 135~211
- 24) 前注6)
- 25) ドニ・ユイスマン, 久保伊平治訳; 美学, 白水社, 1959, pp. 58~63
- 26) ルネ・クロジエ, 野田早苗訳; 地理学史, 白水社, 1970, pp. 50~82
- 27) 野間三郎; 近代地理学の潮流, 大明堂, 1963, pp. 1~87
- 28) 前注6)
- 29) 前注27) Humboldt; Kosmos, 5 Bde, 1845~62
- 30) 前注9)
- 31) ミッシェル・ドヴェーズ, 猪俣禮二訳; 森林の歴史, 白水社, 1973, pp. 54~82
- 32) 前注16) pp. 17~32
- 33) 前注2) pp. 205~220
- 34) 前注9)
- 35) 島崎藤村; 千曲川のスケッチ, 新潮社, 1955, pp. 167~173, 平野謙の解説
- 36) 勝原文男; 農の風景, 論創社, 1979, pp. 89~124
- 37) ラスキンの, 澤村寅二郎訳; 近代画家論, 昭和二年, ラスキンの著作の一巻と三巻を訳出したもの。
ラスキン, 御木本幸三訳; 近世画家論, 昭和七年, ラスキンの著作全五巻の訳出。
- 38) 前注36) pp. 37~86
- 39) スミルノフ主監, 柴田義松他訳; 心理学上, 明治図書, 1974, p. 114
- 40) 前注39) pp. 19, 20
- 41) M・D・ヴァーノン, 上昭二訳, 知覚心理学, ダヴィッド社, 1966, pp. 17~47
- 42) E・ホール, 日高敏隆訳; かくれた次元, みすず書房, 1970, pp. 182~227
- 43) 前注39) pp. 95~113
- 44) 別技篤彦; 人間と地域, 古今書院, 1965, pp. 20~27
- 45) 上原敬二; 造園大系 8 風景要素, 加島書店, 1975
今田敬一; 文献にみる風景要素, 風景 vol. 6 No.5, 1939, pp. 3~5
- 46) 千葉徳爾; 地域と自然, 大明堂, 1966, p. 20, p.47
木内信蔵; 地域概論, 東京大学出版会, 1968, pp. 29, 30
- 47) 杉浦明平訳; レオナルド・ダ・ヴィンチの手記, 岩波書店, 1954, pp. 256~288
- 48) 前注2) pp. 143~151
- 49) 前注46) 木内, p. 87
前注27) pp. 88~101
- 50) 中村一は英語の landscape を景觀と風景の語に区別して訳すと述べている。G・エクボ, 久保貞他; 景觀論, 鹿島出版会, p. 3
- 51) 今田敬一; 風景審美の態度, 風景, vol. V No. 1, 1938, pp. 5~7
- 52) 柿崎祐一・牡野達郎編; 心理学 1 知覚・認知, 有斐閣, 1976, p. 13

- 53) 前注39) pp. 19~21
- 54) 沢田允茂; 認識の風景, 岩波書店, 1975, pp. 68~113
- 55) 辻村太郎; 景観地理学講話, 地人書館, 1937, pp. 1~6
- 56) 樋口忠彦; 景観の構造, 技報堂, 1970, pp. 10, 11
- 57) 大山正; 講座心理学4 知覚, 東京大学出版会, 1970, pp. 61~67
- 58) 新田伸三; 造園環境論序説, 造園雑誌, vol. 25 No. 1, 1961, pp. 14~16
- 59) 著者; 中国山地景観調査報告; 東中国山地自然環境調査報告, 1974, pp. 274~275
- 60) 著者; 生駒山系緑化対策の研究, 京都大学造園学研究室, 1967, pp. 63~68
- 61) 著者; 森林風景計画; 造園技術大成, 養賢堂, 1978, p. 708
- 62) W・メッツガー, 大智浩他訳; 視覚の法則, 白楊社, 1962, pp. 205~206
- 63) 西山卯三; 住居学ノート, 勁草書房, 1977, pp. 1~34
- 64) アルフレート・シュミット, 元浜清海訳; マルクスの自然概念, 法政大学出版会, 1972, pp. 19~37
- 65) 前注46) 木内, pp. 23, 87, 90, 339, 340
- 66) 前注46) 木内, p. 90「グラニューは観察者を中心とする近景, 中景, 遠景を区別している。」
- 67) 風景要素は知覚されうる形態的空間階層秩序によって捉えられ, 要素の変化, 要素相互の作用は要素に内在すると仮定した力によって行われると考える。例えば, 大気要素における熱, 土地要素における重力と地下の営力, 植物と動物要素における生命力など。
- 68) 前注42) pp. 160 ~181, 主体の感覚と行動が距離といかに関係しているかを述べている。
- 69) ワルター・グロピウス, 蔵田周忠他訳; 生活空間の創造, 彰国社, 1958, pp. 34~36
- 70) 前注64) p. 56
- 71) 前注2) pp. 87~117
- 72) 前注2) pp. 35~39
- 73) 前注57) pp. 191~210
- 74) 前注1) p. 268
- 75) 前注1) pp. 247~277
- 76) 前注39) p. 157
- 77) 前注39) pp. 114~156
- 78) 溝上泰子; 生活人間学, 国土新書, 1968, pp. 130~145
- 79) 大山正・乾正雄編; 建築のための心理学, 彰国社, 1969, pp. 13~16
- 80) グエン・ホワイト, 笹原貞彦訳; 透視図法, グラフィック社, 1969, p. 6
- 81) 前注42) pp. 263~267, 付録
- 82) 前注68)

Logical Consideration of the Concept "Landscape" (I)

Seigo Itoh

Laboratory of Landscape Architecture, Fac., Shinshu Univ.

Summary

People have paid attention to landscape since the beginning of the modern age. For example, Ruskin, between 1843-1860, discussed with modern painters their landscape representations. It is the purpose of this paper to discuss the concept "Landscape".

Landscape is a total outdoor space perception and is perceived in the context of the spatial relationship between man and his external world. Man receives impressions from the landscape form, images and makes associations with it. On the other hand, landscape is perceived as the composition of various classifications of elements, and knowledge of the landscape elements and their compositions comprise its geographical cognition. Therefore, landscape perception is caused by the image and the reflection from the external world. The concept "Landscape" may be expressed schematically as the relation between subject and object, and between man's consciousness and the external world. Landscape perception is that which makes the spatial relationship between two dimensions and three dimensions, and between the distant and near viewpoints. The landscape prospect is that which forms the compositional relation between the whole and the parts, and between the whole(macro-scale) and the details(micro-scale). Landscape consciousness establishes the cognitional connection between form and function, and between outside and inside. The landscape perception is established by the synthesis of these relations.

The total relationship between man and his external world is the life environment. Man can choose the positions for the landscape perception within the life environment. The relation between the life environment and these positions may be said to be the relation the whole and the parts. Taken in perspective, landscape perception has a spatial structure which comprises front, perpendicularity, horizon and movement. These spatial structure frames are transformed into life experiences through the medium of kinetic muscular sensations.